

## 臓器提供に対する肯定的・否定的評価がドナー家族の心理的適応に与える影響

専 攻：学校教育研究科

コ ー ス：臨床心理学コース

学籍番号：M08082A

氏 名：中西 健二

### 【目 的】

本邦では臓器提供者（ドナー）家族の心理社会的ケアを担う専任の移植コーディネーター（Co）がおらず、ドナー家族の心理的適応に関する研究も海外に比べ大きく遅れている。そこで、本研究では以下の4点を検証し、移植Coのドナー家族対応業務に関する有益な知見を得ることを目的とする。

- 1) ドナー家族の心理的適応を標準化された尺度で評価するとともに、臓器提供の経験がない遺族（突然死、非突然死）と比較する。また、死別の状況や医療に対する満足度、臓器提供関連要因等が心理的適応に与える影響を検討する。
- 2) 臓器提供に対する満足度を把握するとともに、その満足度に影響する要因、さらに満足度が心理的適応に与える影響について検討する。
- 3) 臓器を提供したことに対するドナー家族の肯定的・否定的評価を測定できる多次元構造を持つ尺度を作成し、各肯定的・否定的評価がドナー家族の心理的適応に与える影響を検証する。
- 4) 死別の状況や医療に対する満足度、臓器提供関連要因、臓器提供に対する肯定的・否定的評価や満足度といった各要因間の関係を考慮した包括的なモデルにおいて、ドナー家族の心理的適応を検討する。

### 【方 法】

対象：2004年1月から2009年3月の間、心臓停止後の腎臓提供を経験したドナー家族のうち、本

研究の条件を満たした347家族に対して調査への協力を依頼した。この結果、31家族は宛先不明で、153家族（回答率48.4%）215名から調査票の返信があった。このうち有効回答が得られた142家族198名を分析対象とした。

調査内容：調査票は、1) フェイスシート、2) 医療および移植Coに対する満足度、3) 臓器提供の決断、4) 臓器提供に対する肯定的・否定的評価、5) 臓器提供に対する全体的満足度、6) 心理的適応（抑うつ：Center for Epidemiological Studies Depression (CES-D) 短縮版、PTSD: Impact of Event Scale-Revised (IES-R))に関する質問から構成される。

### 【結 果】

分析対象者198名のうち、男性は101名(50.5%)、女性は97名(49.5%)であり、平均年齢は52.9±14.2歳であった。死別後の経過期間は平均929日±584日であり、ドナーとの続柄は配偶者68名(34.3%)、親53名(26.8%)、子42名(21.2%)、同胞30名(15.2%)、その他5名(2.5%)であった。死別当時ドナーと同居していたのは141名(71.2%)であった。

#### 1) ドナー家族の心理的適応

対象者の心理的適応については、CES-D短縮版の平均得点は6.1±4.7点であり、46名(23.1%)が臨床的基準値以上と判定された。IES-Rの平均得点は15.0±16.0点であり、こちらも46名(23.1%)が臨床的基準値以上であった。CES-D

短縮版の結果を A 救命救急センター外来死患者遺族のデータと比較したところ差は見られなかった。また、複数の要因が心理的不適応と関連性を持ち、特に「死別後の経過期間」・「ドナーの年齢」・「提供決断の迷い」は強い影響力を持つことがわかった。

## 2) 臓器提供に対する満足度

約 8 割のドナー家族が臓器提供を行ったことに満足しており、満足度が高いほど心理的不適応は良好であった。また、臓器提供の意思表示が有ることと移植 Co の配慮ある対応は、臓器提供決断における家族の迷いを低減し、そのことが臓器提供に対する満足度に影響していた。

## 3) 臓器提供に対する肯定的・否定的評価

先行研究を検討し、さらに複数名のベテラン移植 Co に意見を求めた上で、臓器提供に対するドナー家族の肯定的・否定的評価を尋ねる尺度を作成した。因子分析の結果、「愛他的行為としての肯定的評価」・「否定的評価」・「故人への愛情としての肯定的評価」の 3 因子 11 項目の組み合わせを選択した。なお、本尺度の信頼性と妥当性は十分高いことがわかった。

次に、肯定的・否定的評価が臓器提供に対する満足度と心理的不適応に与える影響を検討した。構造方程式モデリングの結果、「愛他的行為としての肯定的評価」は、臓器提供に対する満足度を高め、その結果として間接的に心理的不適応を促進していた。「否定的評価」は、心理的不適応に直接悪影響を及ぼすだけでなく、臓器提供に対する満足度を下げ、間接的にも心理的不適応を招くことがわかった。また、「故人への愛情としての肯定的評価」は、臓器提供に対する満足度を高め、その結果として心理的不適応を間接的に促進するが、直接的には心理的不適応を抑制していた。よって、「故人への愛情としての肯定的評価」が心理的不適応に与える影響は間接的な促進効果と直接的な

抑制効果が相殺され、総合効果としては有意な影響を与えないことがわかった。

## 4) 心理的不適応に関する包括モデルでの検討

構造方程式モデリングの結果、「提供決断の迷い」に対しては、「臓器提供意思表示の有無」と「移植 Co の配慮」が負の影響を与えていた。

次に、「愛他的行為としての肯定的評価」に対しては、「治療方針・内容に対する納得」と「移植 Co の配慮」が正の影響を与え、「否定的評価」に対しては、「提供決断の迷い」が正の影響、「移植 Co の配慮」が負の影響を与え、「故人への愛情としての肯定的評価」に対しては、「臓器提供意思表示の有無」が正の影響を与えていた。

続いて、「臓器提供に対する家族の満足度」に対しては、「ドナーの年齢」と「愛他的行為としての肯定的評価」、さらに「故人への愛情としての肯定的評価」が正の影響を与え、「提供決断の迷い」と「否定的評価」は負の影響を与えていた。

最後に、心理的不適応に対しては、「ドナーの年齢」と「死別後の経過期間」、「臓器提供に対する満足度」が負の影響を与え、「否定的評価」と「故人への愛情としての肯定的評価」は正の影響を与えていた。

## 【結 語】

臓器提供したことで、しなかった場合に比べて死別悲嘆が軽減されるということはないが、臓器提供に関係するいくつかの要因は死別後のドナー家族の心理的不適応に影響することが示された。中でも臓器提供に対する満足度は、死別後の心理的不適応に大きく影響することがわかった。よって、移植 Co には家族の喪失感に配慮しつつ、家族が臓器提供したことを後悔しないような係わりを持つことが求められる。

主任指導教員：市井 雅哉

指導教員：市井 雅哉